

## 「九州派展」

南 崑 宏（元 熊本市現代美術館長）

おそらく、この種の後味の悪さについて語ることが、「九州派展」（福岡市美術館）を記述する作業につながるものなのかもしれない。それは、ひとつの時代の終焉に立ち会わざるをえないわれわれにとって、天皇制というシステムに照射される九州派の場所というものが、いかなる美術運動よりも「昭和」を意識させるからであり、九州弁で美術を語るという熱き残響が、けっして過去のものでないという事実を、今回、突きつけられたからでもある。そして、なによりも九州派が美術史のみの対象たりえない側面をもち、いまだそのタブーは封印されたままであるからに違いない。

シンポジウムで千葉成夫は彼のいう「日本固有の美術」の系譜に九州派を比定したが、それは「もの派」を史的にそうとらえるのとは別の次元で、中心からの距離という構造において、日本固有の美術の場所を露呈する唯一のグループであったというべきかもしれない。

もちろん、活動の場をフランスに移した桜井孝身や、意図的にシンポジウムには欠席したと思われる菊畑茂久馬の近作と九州派との関係を意味づけることは、たとえば農民闘争というプロレタリア演劇から出発した太田省吾の転向に対する菅孝行の批判と、この二十年におよぶ転形劇場の成果を語る際のギャップと同じように、ここではその両者に共通する「昭和」という時代における文化の場所そのものが、今、われわれが九州派を問うときに抽出されてくる最大の問題であるように思われるのである。そして、病床にあっても、あらゆる引力カの源としてあるオブジェのような天皇制を気づかされるとき、あたかもブニエルの「皆殺しの天使」のように、すべての事件もあの昭和の一夜の出来事として、幻想の密室に封印されつづけていくことを思いしらされるのである。

千葉が「早産であろうと死産であろうと、戦後美術を拾い上げていく」というとき、まず必要なのは、そうしたわれわれにとっての美術の場所の確認であるに違いないのだ。